

巻頭言

変わらぬ協会の重大使命の遂行に向けて

株式会社熊谷組 代表取締役社長 櫻野 泰則



本号が平成最後の「土地改良」になります。昨年は、土地改良建設協会が社団法人として認可を受けて設立されてから、ちょうど五〇周年の節目の年でありましたが、今から六〇年前の昭和三十四年十二月に当協会は任意団体として設立され、その四年後には本誌「土地改良」が機関誌として創刊されました。その創刊のことには、「土地改良建設協会会長で参議院議員の弊社社長であった熊谷太三郎が「協会の重大使命達成へ」と題し、「わが国の農業が、戦後の食糧増産対策という至上命令のもとに相次ぐ台風の甚大な影響を受けながら飛躍的發展を示したのも土地改良事業に負うところが少なくない。今後、農業の近代化促進のため基盤整備を推進することが当協会の重大な使命ではないか」と問いかけました。昭和、平成にかけて、当協会が取り組み果たして来たこの使命は、来月から新しくなる令和に至ってもいささかも揺るがず、未来永劫変わらないものだと思います。

身近な例えで恐縮ですが、私の生まれ育ったところは富山県高岡市です。生家はまさに庄川の堤防際にあります。庄川、小矢部川は、散居村で有名な砺波平野を潤して豊穡をもたらすとともに、時には水害や干害の災害を発生させました。私が生まれた以降も、台風による洪水で庄川に架かる鉄橋が落橋したり、農地・宅地が広く浸水したりしたことが数回あったと記憶しています。

この地は大化の改新以降は越中国と呼ばれ国府が置かれていた所で、天平の時代には万葉歌人の大友家持が国守として赴任していた

ことがあります。

立山に降り置ける雪を 常夏に見れども飽かず 神からならしめ
という歌を残していますが、庄川、小矢部川はこの立山から連なる飛騨山系に源を発し、古代から中世を経て近世に至るまで、庄川の兩岸には幾本もの用水の取入れ口が造られ、先人達の血が滲むような利水と治水の取り組みが積み重ねられて来ています。特に徳川時代は加賀藩の治下となり、砺波扇状地平野を穀倉地帯にしようと庄川の治水と開田に藩の力を傾注してきました。そのような苦労の上に今の故郷があります。高岡高校野球部の時に甲子園を目指し毎日汗を流して練習したあのグラウンドが、長年に亘る庄川と小矢部川の治水事業の結果として出来上がった中洲であったことを最近になって知りました。

昨年度、庄川左岸地区国営農地防災事業が一〇年の歳月をかけて完成し、用水と排水の機能が強化されました。弊社もこの工事に参画し、当協会の重大な使命の一翼を担うことができたことと誇らしく思っています。

これからの膨張する地球人口、拡大する情報・交通と通商・貿易、不安定化する世界秩序、頻発する災害の中にあつて、私たち日本人の安心、安全な食料を安定的に供給する基盤を確保していくことは国としての普遍的な重大使命です。この使命遂行のために、当協会が果たす役割には大なるものがあります。会員の皆様と力を合わせて取り組んでいきたいと思えます。